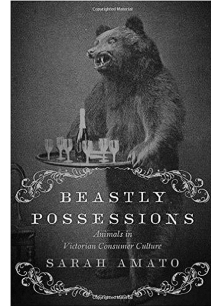


書 評

Sarah Amato, *Beastly Possessions: Animals in Victorian Consumer Culture*

(Toronto: University of Toronto Press, 2015)



伊東 剛史

イギリスの動物史 (animal history)、あるいは人と動物の関係史にとって、今や古典と見なされるようになったキース・トマス『人間と自然界』(1983年)とハリエット・リトヴォ『階級としての動物』(1989年)が出版されてから約30年が経った。この間に研究は着実に進展し、とくに近年は新たな研究成果が相次いで発表されている。本書は、こうした動物史研究の活性化を反映した作品である。

著者のSarah Amatoは、ヴィクトリア期の動物を消費社会における商品と捉え、ミドルクラスの日常生活やライフサイクルにとっての動物の意味を探求する。ヴィクトリア期には、ペットを飼うこと、動物園に通うこと、自宅に剥製を飾ることが消費の様式となり、動物に関わる消費行動が社会的地位を表わすようになった。その過程には、人間と動物、文明と野蛮、男性と女性とを差別化し、序列化したヴィクトリア期のイデオロギーが反映されている。このことを定期刊行物などの多様なメディアを史料として考察するのが、本書の主旨である。

本書は従来の研究にはない、包括的で一貫した分析の枠組みを提示する。例えば、トマスやリトヴォ、あるいはヒルダ・キーン(『動物の権利』[1998]の著者)は、人間が動物と正面から対峙する歴史を描いてきた。それは、産業革命期を通して動物を支配する力を得た人間が、19世紀には動物保護の理念を発展させ、それを実現すべく社会運動を展開したというストーリーを前提としている。それに対して本書は、消費文化というヴィクトリア期の社会全体を覆う大きな参照枠を用意することで、人間と動物とを媒介するいくつかの経路を辿りつつ、人間社会の広範な領域に動物を

再定位しようとする。動物保護を目指した特定の活動家ではなく、何気なく動物と接した不特定多数の消費者が本書の主人公なのである。

第1章は、ペットを扱う。一口にペットと言っても、ヴィクトリア期にペットにされた動物は、犬猫だけでなく、ロバ、ヤギ、ニワトリ、カナリア、ハトからマウスやラット、モルモットまで多岐にわたる。従来の研究は、室内飼いのペットが家族的愛情の対象になったと指摘してきたが、本書は繁殖、愛玩、食用などの用途や目的による種類の区別は、それほど明確ではなかったと指摘する。たしかにこの指摘は正しいが、本書はウマやヒツジなどの家畜(経済動物)を議論から除外し、イヌやウサギの実験動物としての側面には言及しない。そのため本書が選んだ動物とその用途について、著者の選択基準に多少の疑問が残る。一方、ペットの馴致は飼主の徳性を示すという考え方が定着し、ペット訓練に必要なモノ(鳥籠、首輪、口輪など)が商品として流通したという議論には、十分な説得力がある。動物愛好家がクラブを作り、品評会を繰り広げたことは、ペットが消費社会とアソシエーション文化の結節点になったことの証左である。

第2章は、ペット飼育とジェンダーの関係を分析する。具体的には、いわゆる男女の分離領域(*separate spheres*)などのヴィクトリア期のジェンダー規範、とくに女性参政権をめぐる論争との関係が考察される。たとえば、猫には貞節と性的放縦、従属性と独立心、無垢と強欲との両極端の属性が与えられたが、この両義性は女性に対して抱かれたものと同じだった。したがって、女性の愛猫家は猫のリスpekタビリティだけでなく、飼主たる自分自身のリスpekタビリティを確立しなければならなかったと著者は説く。一方、忠誠心やヒロイズムの属性を付与された犬は、伝統的なマスキュリニティの表象だったため、女性が男性の支配するブリーダーの世界に進出することには、参政権と同様にジェンダーの壁が立ちはだかったという。

第3章は、ロンドンの一大行楽地だったロンドン動物園へと議論が移行する。この章で強調されるのは、動物だけでなく見物客もまた動物園の展示物だったという点である。つまり、ロンドン動物園は帝国から収集された動物を馴致する場であると同時に、人びとを社会秩序に組み込む場でもあった。とはいえ、馴致・規律の場としての動物園は、その通り機能

したわけではない。動物は常に人間の意図通りに行動するわけではなかったし、人間の側も動物を挑発し危険を招くことがあった。そして、檻に閉じ込められた動物と園内を闊歩する人間とのコントラストは、やがて人間もまた動物園展示の一部だという省察をもたらした。このことを著者は、ガーネット『動物園に入った男』(1924年)をもとに分析する。この作品が出版された頃には、動物園という語に人間の(無秩序な)集合という意味が加わっていた。

第4章は、1884年にロンドン動物園で展示された白象に焦点をあて、ホワイトネスをめぐる言説を分析する。タイで崇められると伝えられた白象は、白人の人種としての優位性を示す動物と考えられ、多くの関心を集めた。しかし、実際の白象は「白い」とは言いがたく、見物客やメディアに失望をもたらした。白象は、まさにこの言葉の比喩の意味である「無用の長物」として展示されたのである。ここで著者は、この頃現れた石鹸の宣伝広告に目を向ける。象の体を石鹸で洗ってみると、洗った場所が白くなったという広告がある。黒人の子供を石鹸で洗うと肌が白人のように白くなったという広告がある。こうした広告からは、ホワイトネスは劣化しかねないもの、それゆえ(石鹸で洗うという)維持の努力が必要だという不安が読み取られるという。

結論を兼ねる第5章は、剥製というテーマに沿って議論を展開しつつ、本書の内容を総括している。著者によれば、ベンサムが説いた自己標本(オート・アイコン)の有用性は、身体の不可侵性を信じる同時代人には受け入れ難かったが、魂の存在が疑わしい動物の場合は、剥製にすることが心理的抵抗を生むことは少なかった。剥製となった飼猫は死後も飼主の寵愛を受け続け、仔象から作られた椅子や、サルの燭台はインテリアを異国情緒豊かに飾った。博物館では、動物の剥製は当時流行したジオラマ展示に不可欠の存在だった。剥製は動物の擬人化表現を広める一方、文脈に応じて意味や価値が付与されるモノだったのである。こうして動物の剥製は、帝国、階級、ジェンダー、消費文化によって彩られたヴィクトリア期の世界観を照射した。本書に収められた現存する剥製の写真は、その生々しい物質性を読者の眼前に蘇らせ、人と動物とモノの境界はどこにあるのかと問いかける。

本書の優れた点は、ヴィクトリア期の文化を理解するうえで要となるテーマ——階級、ジェンダー、人種、帝国、マテリアル・カルチャー——を消費文化という大きく広げられた傘の下に配置し、分析ツールとしてバランス良く活用するところである。その特徴は、やや概観的な1章から3章よりも、白象という具体例を掘り下げた4章に現れている。動物の剥製を分析するヒントをベンサムの自己標本に求めた5章の行論も、果たして標本 (specimen) と剥製 (taxidermy) とをイコールで結んで良いのかという疑問を残すが、刺激的な魅力があった。方法論という面では、1章冒頭でペットに纏わる小話を並列した手法が印象深い。そこでは文学(虚構)と歴史(事実)との曖昧な境界を逆手にとって、人と動物とのインターアクションをリアルに再現しようとする著者の目論見が明かされる。人のようにには史料を残すことのない動物のエージェンシーをどう捉えるかという課題に対し、本書は想像力を介した書き手と読み手との協働関係を築くことで、活路を見出そうとする。

しかし、この手法は解釈と叙述を混乱させることがある。たとえば、白象をモデルにした石鹸広告の分析において、筆者は広告制作の事実、広告製作者の意図、消費者の広告への反応、そして自分自身の広告の解釈を、ほとんど同列に扱っている。このような一元的な史料の読み方は、ロンドン動物園の建築様式の解釈にも見られる。著者によれば、ロンドン動物園の動物舎は、後発のベルリン動物園やアムステルダム動物園とは異なり、異国情緒よりも住居という要素が強調され、馴致や序列化というロンドン動物園の意義を示したという。しかし、実際にロンドン動物園の成立過程に関する史料を丹念に調査すれば、そうした建築様式になったのは、動物や人間の教化という意図からではなく、敷地貸与に関わった大蔵省との交渉の積み重ねの結果だったことがわかる。また、メディアの反応や、個人的な動物園体験記を調べれば、風景式庭園の文法から逸脱して多彩な要素を取り込んだ動物園は、同時代の見物客にとって十分エキゾチックな空間を提供したこともわかる。

以上のように、本書には史料の実証的分析よりも、恣意的解釈が優先される箇所がいくつか見られたが、全体としては、汎用性の高い社会理論を動物史に応用した成功例と言えるだろう。文章は平易で読みやすく、やや

冗長に感じられる部分はあったものの、個々のエピソードの面白さに読者を引き込む筆力があつた。動物史の格好の導入書として、評者は早速本書を当該講義のリーディングリストに加えた。関連テーマに興味のある研究者や大学院生だけでなく、意欲的な学部生にも勧めたい本である。

——東京外国語大学准教授